再会

中町礼願

水田麗子は久しぶりの同窓会に出席した。新型ウイルス蔓延の恐怖が薄らいで、何となく緊張が解けたこともある。三月に子供たちを見送って教師を卒業したいま、時間の制約もなくなった。それに久しぶりに会ってみたい人間もいた。

中学校の同窓会は五年振りである。前回は還暦を迎えた時だったので、参加者も多かった。その時に比べると随分疎らだ。感染者が激減したとは言え、飲食を伴う集会には否定的な目も残っている。

会場に入ると麗子は周囲をキョロキョロと見回し、最も親しかった道子の姿を探し出した。

「道子！　久しぶり」

振り向いた道子が両手を振ってハイタッチしてきた。

「麗子、卒業おめでとう。やっと自由になれたんだね」

「ありがとう。いきなり自由だなんて言われても戸惑うばかりよ。ポッカリ穴があいてしまったみたい。何をしても満たされないの」

「そのうち慣れるわよ。時間なんて何もしなくても過ぎて行く」

「それがね、わたし、貧乏性だからか、何かしてないとダメなんだなあ。体を動かしていないとすぐに落ち込んじゃう」

「サラリーマン一筋の男性だって卒業すると、最初は暇を持て余して苦労するらしいけど、いつの間にかボーっと生きていくようになるのよ」

麗子は道子の言葉に頷けなかった。満開の桜の木々に見送られて学校を離れて半年。何をやっても満足しなかった。針仕事をしたり、ウオーキングをしたり、ジムに通っても充実しない。話題の小説を読んでも、満たされるのはその時だけだった。

部屋の片付けも庭の手入れも、心の隙間を埋めてはくれなかった。

ため息ばかりついている毎日から脱却したいと思い始めていたとき、同窓会の知らせが届いた。しかし、実家には顔を出し辛い。年老いた母のことが気になってはいたが、あまり折り合いの良くない兄夫婦と顔を合わせるのが億劫だった。今回は実家に内緒でホテルをとっていた。

道子と麗子が話し込んでいると、三年振りの赤城が声を掛けてきた。中学ではあまり目立たない男子だったが、国立大学を一発で受かった秀才である。髪がだいぶ白くなっている。

「水田、よく来たね。この前はサンキュー」

赤城は麗子の暮らしている県庁所在地にある大学の出身なのだ。三年前にその大学の同窓会に出席した際に麗子と会っていた。

あの時麗子は小学校六年生の担任だったので、非常に忙しくしていた。それで夕方の一時間をファミレスで会い、翌日の土曜日に彼の卒業した大学構内を少しだけ一緒に歩いた。

還暦の同窓会でも話したが、二人だけで会ったのは初めてだった。共通の友達の近況を披露して、自分の生活ぶりを話している内に話題が尽きた。赤城自身、寡黙な方だったし、それほど親しかったわけでもないので、彼女はつい他のことに思いが飛んでしまった。

麗子には気になっている存在があった。何年経っても心の片隅に残っているシコリのよう

なものだった。しかし、赤城に話すには躊躇いがある。
　中学三年のクラス替えで初めて一緒の組になった意中の彼は、学校中の人気者だった。確か赤城とは家が近所で幼馴染だったと思う。
　名前は一柳博之。生徒会役員にして野球部の副キャプテン。麗子と同じクラスになったとき、すぐに打ち解けたのは彼の明るさのおかげだった。
　生徒会の選挙で学校始まって以来の得票数を獲得し、学校中のリーダーだった彼は女生徒たちの人気者だ。ある時、一学年下の女生徒が教室にやってきた。大きな紙袋を抱えた女生徒は何人もの仲間を後ろに従えている。告白が目的の襲撃であることは一目瞭然だった。
　それを察した一柳が麗子に耳打ちしてきた。
「麗子ちゃん、申し訳ないけど付き合っていることにしてくれ」
　そういうと彼女の左手を握りしめて廊下に引っ張っていく。
「ごめん。俺たち付き合っているんだ」
　一年年下の女子生徒は先手を打たれた。何も言えずに引き下がるしかなかった。さすがに東京からの転校生も形なしである。
　麗子はドキドキが治まらなかった。この出来事以来、頭の中に一柳が住みついてしまった。
　事件はその三年後に起きた。高校三年の部活を引退した直後の日帰り旅行の日。部活漬けの三年間から解放されたこともあり、女友達四人で列車の旅をした。純情だった十七歳、十八歳たちの話題は気になる男の子のこと、それと高校卒業後の進路についてだった。
　旅の帰り、残暑の夕暮れ時みんなに後押しされて一柳の自宅に立ち寄った。道路端で四人の女子が躊躇していると一柳が家から出てきてくれた。
「一柳君、少し話がしたいの」
「じゃあ、小学校の校庭にでも行く？」
　自転車で十分ほどの校庭に行くと、芝生の丘に人の姿はなかった。日中の照り返しの名残もなく、緑の絨毯はうってつけの舞台だった。
　二人が並んで座ると、残りの女子たちは遠巻きに控えていた。
「一柳君、中学の時のこと覚えてる？　わたし、彼女役になったんだよね」
「ああ。あの時のことね。なんとなく麗子ちゃんしか思い浮かばなかったんだ。全部わかってくれると思っていたし」
「わたしね、あのまま彼女役が続けられればいいと思ったりしてたんだよ」
　今日、みんなで列車旅行して話しているうちに、一柳君のことで頭がいっぱいになった。そのことは言葉にできなかったが、会って気持ちを伝えたかったのは事実だ。
　喉元に出かかった言葉を呑み込んでいると、見知った顔の集団が近づいてきた。六人の集団はみな同級生だった。いつの間にか不良っぽさが増したワルたちの中心には、バイクにまたがったシゲちゃんがいた。
「麗子、こんなとこで何してんだよ。おまえ、俺を袖にして、一柳と付き合ってんのか」
「シゲちゃん。そんなんじゃないから。わたしが一柳君に声かけて。久しぶりに話したかっただけだから」
「一柳、最近、おまえスカしてるよな。駅で会っても無視したよなあ。俺とタイマン張ろうぜ」
　突然シゲの頭突きとヒジウチが一柳の顔面をとらえた。喧嘩慣れしたシゲの攻撃に一柳は抵抗しなかった。できなかったのだ。抵抗すれば傷が深くなる。ここは耐えるしかないと考えた。無抵抗の同級生をこれ以上攻撃してくるはずがないとさえ計算していた。
「さすがシゲ。必殺技二発で決めたぜ」という

声は関根だった。中学時代、優等生の一柳を快く思っていなかったヤツだ。
「もうやめてー」
こんな展開を誰が予想できたろうか。麗子の必死の声がこだました。
いつの間にか他の女子たちは居なくなっていた。一柳はズキズキする頭を必死に巡らした。シゲたちが麗子に手を出すことはあるまい。不良高校のワルだって好きな女の子に暴力を振るわないだろう。ここは嵐の通り過ぎるのを待つことだ。一柳は跪くと、そのまま横に頽れた。
「根性ねえな。少しは男気出せよ。かかって来いよ。麗子が呆れているぜ。がっかりさせるなよ」
茶化しても一柳は抵抗を見せなかった。額がジンジンしたし、鼻骨が折れた感覚すらある。抵抗すればケガが大きくなるだけだ。
一方のシゲは自分に振り向いてくれなかった麗子を睨みつけた。涙を滲ませた彼女の目が絶望を物語っていた。全身で拒絶を表現していた。
「俺は見限られてしまったようだな」
シゲの興奮が急に引いていく。
捨て台詞を発することもせず、シゲはバイクを発車させた。
六人の男たちが立ち去ったのを確認すると、一柳はゆっくりと体を起こした。麗子がハンカチを濡らしに手洗い場に向かっている。それを追うように膝に手を当てて一歩踏み出す。体が軋んでうまく歩けない。
ふらつきながら漸く洗い場にたどり着く。流し台に手をつくと蛇口を開き、顔を浸した。鼻筋がくの字に曲がってしまったようだ。
麗子が背中をさすってくれている。彼女は泣きながら「ごめんね」を繰り返し、やがて「なんでこんなことに」と声を絞り出した。
濡れた顔を拭き取ると、一柳は掠れた声を出した。
「麗子ちゃん、送っていくよ」
「大丈夫？お医者さん行かないと」
「あとで痛みが引かなかったら行くよ」
それからは無言で自転車を漕いだ。
その後、結局二人が付き合うことはなかった。何度か手紙のやり取りをしただけで、麗子は自分から気持ちを断ち切った。
それから何十年も経った同窓会の名簿に一柳の近況が記されていた。彼は麗子にとって、なじみの深い街に住んでいた。彼女が大学時代に住んでいたアパートと同じ町内だった。
還暦の同窓会では、一柳が東京のお金持ちの奥さんをもらって暮らしていると噂に出ていた。
「麗子ちゃん、なにボーっとしてんの」
赤城の声で四十数年前から引き戻された。
「いやあ、ちょっと思い出したことがあって」
道子も心配そうに麗子の顔を凝視している。
「誰か意中の人を思い出していたんでしょ。麗子、もしかして」
「そんなんじゃないよ。わたし学校以外のこと、なんにも知らないから、みんなの変化についていけないの」
実際に置いてけぼりの感覚があった。建築家の夫を通した世界と教育現場以外なにも知らなかった。
一柳はどんな暮らしをしているのだろうか。結局、今回も彼は出席していない。もう田舎を捨ててしまったのだろうか。
会いたかった。どうすればいい。
ホテルに戻るとなかなか寝付けなかった。考えた末、名簿の近況報告に書かれた携帯電話にショートメールを打った。

反応は早かった。
――ひさしぶり。連絡ありがとう。こんな時間だけど電話していい？
――はい。ひとりでホテルに泊まっているので大丈夫です。

その後の電話で再会を約束し、彼は麗子の住まいの近くまで来てくれた。夏のような日差しの残る十月半ば。土曜日の朝だった。
ファミレスの駐車場で待っていると、都内のナンバーを付けた車が入ってきた。五十年ぶりなのにすぐに分かった。麗子は自分の車から降りると手を振った。
白い歯と長身の少年が五十年経って自分の前に現れた。少し肉付きがよくなったようだが、髪は黒々としている。染めているのだろうか。お似合いの黒いポロシャツには社名が入っている。思った以上に若々しい。
ファミレスで彼はモーニングメニューを選び、旺盛な食欲を示した。夕べ早い会食を取引先と済ませ、ビジネスホテルに泊まってきたらしい。
サニーサイドアップのたまごを頬張りながらオレンジジュースを流し込む。会話が次々と飛び出し、麗子は目を細めて一柳の目と口元を眺めていた。
五十年ぶりなのに、昔のまんまだ。学校給食を向かい合って食べた時のことを急に思い出した。彼の明るさは安心できた。
その日、別れ際に一柳はやや冷たい手を差し伸べてきた。握手してくれた右手があの時を鮮やかに思い出させてくれた。

その後、待っても待っても彼からの連絡はなかった。再会を果たした日に交換したＬＩＮＥも無反応だった。こちらから連絡しても既読にすらならなかった。
麗子は活発に語り掛けてきた一柳の言葉を全部覚えていた。一言も聞き逃すまいと必死に集中したのに、あれは何だったのだろう。
麗子の中に疑問が芽生えていた。あの明るさは何だったのだろう。カリカリのベーコンをレタスに包んでニコッと笑った白い歯は、この沈黙の裏返しだったの？……。
わたしの話も一つ一つ相槌をうってくれた。専業主婦になった麗子の実情にも理解を示してくれていた。満たされない毎日について決して贅沢な悩みだとは言わなかった。部活に没頭した日々も、授業に専念した年月も全て頑張ったんだねと好意的にとらえてくれた。そのうえで自分に合った趣味や仕事を徐々に見つけていけばいいと言ってくれた。あの優しさはその場限りのお体裁？
「お母さんのこと、心配だね」
その言葉を思い出すと涙が滲んだ。

このままでは前に進めない。決断するとスマホの地図アプリに一柳の住所を登録して出掛けた。空港の近くの駐車場に車を停めて、東京行きの都市ライナーに乗り込んだ。
乗り換えの地下鉄は新型ウイルスの感染リスクが高いと感じ、窓の開いた都営バスを選択した。予想した通り、乗客も少なく換気も行き届いている。少し安心して一番後ろの席に座った。
最寄りのバス停までは四十五分ほどで着いた。大学時代の通学ルートとは違っていたこともあり、多少の戸惑いを感じたが、すぐに懐かしい交差点を探すことができた。よく利用したパン屋さんは健在だった。しかしその隣にあったはずのスナックは廃業していた。自分の居たアパートは全く様変わりしていた。四階建ての瀟洒なマンションに生まれ変わっている。
大通りの上り坂を眺めると学生時代の頃が蘇る。歩いて十五分の道のりには汗と涙と溜息

がしみ込んでいるはずだ。振り返ると遠くに日本一の山が聳え立っている。

予選会で着地に失敗した足首の痛みが突然よぎった。あれが選手生命の終わりの起点となった。夢のように膨らんでいた進路は突然萎み、田舎で教員でもしようと考えたあのころ。つらかった日々と今の肩透かしが妙にシンクロし始めた。

教員として採用を勝ち取れず、スポーツクラブのインストラクターに甘んじたのが社会人としてのスタートだった。卒業後の四年間は東京にしがみついた。クラブの会員が斡旋してくれた会社に転職もした。

そしてその会社に出入りしていた建築家の夫と知り合うことになった。

夫が自分の田舎で起業したとき、小学校の教員採用に上手く引っかかった。人口増加の著しかった街なので、夫の仕事も自分の教員としての生活も順調にスタートできた。

東京から千五百六十円の周辺都市で気がつけば四十年近く経ってしまった。

大学は有名建築家の設計で表通りの顔が一変していた。RC造のコンクリート表面は打ち放しの表情を崩さない程度にコーティングされている。正面のロータリーには遠征用のバスが何台も停車している。地方大学の名前の入ったバスも停まっていた。

構内に入るのは気おくれした。学校を見学するのも一柳の自宅を探すのも躊躇いがある。いったん気持ちを落ち着けるために、コーヒーショップに入った。

一柳の自宅は大通りから百メートルほど入ったところにあった。角地の一角にモダンな総二階建てが異彩を放っている。手入れされた植栽の中心には桜の木が枝を広げていた。

麗子は一度通り過ぎたあと、十五メートルほど離れたところで振り返った。二階のベランダには生活感を示す洗濯物もなく、窓にはシャッターが半分ほど下ろされている。好天なのにもったいない。明るい一柳の性格に似合わない静寂が漂っていた。

突然、隣の家から元気な声が聞こえてきた。小学校五年生くらいの男の子がサッカーボールを持っている。

スマホを持って立ち尽くす麗子を一瞥するとボールを蹴り始めた。リフティングというやつだ。慣れた足さばきは見事というしかない。見とれていると少年が声をかけてきた。

「おばさん。うちに何か用？」

「こんにちは。そうじゃないのよ」

「じゃあ、おとなりですか？」

「一柳さんのことご存じなの？」

「うん。よく一緒にボール蹴ってくれたから」

「そう。お友達なのね」

「でも、もう一緒にサッカーできなくなっちゃったから。……。おばさん、知らないの？　この前、おじさん亡くなっちゃったんだよ」

「えっ」

急に目の前が真っ暗になった。立っていることができなかった。

少年が母親を呼んでいる。困った。早くこの場を立ち去らないと。

少年の母親が飛び出してきた。

「あのー、大丈夫ですか？」

「すみません。大丈夫です。立ち眩みしただけですから」

「おとなりに何か？」

「いえ。だいぶ前に近くに住んでいたときお世話になったものですから」

「おとなりに声かけましょうか」

「いえ知らなくて、何の準備もして来なかったものですから。また改めます」

「そうですか。タクシーでも呼びましょうか」

「お気遣いなく。通りに出て車を拾いますので……。あの、一柳さんはなんで？」
「車の事故に巻き込まれて。先月、東名高速で大きな事故ありましたよね。ずいぶん頑張ったみたいですけど、処置の甲斐なく」
「そうですか…」
「あの、奥様にお知らせしましょうか」
「いえ。あの、申し遅れました。わたし、水田と申します。後日お伺いさせていただきますので」
麗子はふらつく体に鞭打って立ち上がり、お辞儀した。周りの景色が滲み始めていたが、なんとか歩を進め、百メートルの道のりを振り返ることなく歩いた。
もう何も見えなかった。いや何も見ていなかった。このまま消えてなくなりたかった。

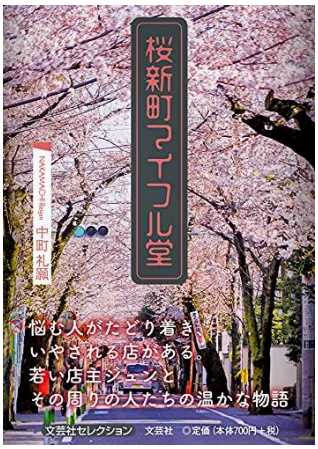
あとの二時間半の帰路は全く覚えていなかった。動物の帰巣本能というしかない。帰り着いたとき、夫が肩を支えて「どうしたんだ」と声をかけてくれた。
あまりの落胆ぶりに、それ以上の追及をしなかった夫の思いやりが有難かった。
それ以降、麗子は喪に服すように静かな日々を送り続けた。

庭に小さな穴を掘ると、そこに一柳からもらった手紙を埋めた。

――シゲが頭突きをしてくる瞬間まで、あいつを疑うことはなかった。同級生だったシゲが自分に暴力をふるうなんて考えてもみなかった。でもあれは麗子ちゃんのせいじゃないよ。
ただ、これから二人が楽しく付き合っていく自信がないんだ。どうしても今回のことが頭に残ってしまう気がする。だから麗子ちゃんは新しい出会いを大切に生きて欲しい。
どうか、あの夏の出来事は忘れて、前だけを見て行って下さい。大人になってどこかで再会したら、きっと楽しく思い出話に花を咲かせることができるはず。そのときまで一先ず、さようなら――

手紙を埋めた土の上にお線香を手向けた。
「さようなら一柳君。再会は夢だったんだね」
（了）

『ひび割れた社長の器』
中町礼願著　幻冬舎刊



『桜新町マイフル堂』
中町礼願著　文芸社刊